

平曲吟譜新集 卷六

紅葉

平家正節一之上、名古屋伝承句

惜奉つる事月日の光を失へる如し
 人の顔も叶茂民の果報も枯き只人間乃
 境こそ悲心なれ

紅葉

人の思ひ付奉る事も知らく延天曆の
 帝と共是より争ひ増せむ可とぞ人か
 大方ハ賢王の名成揚仁徳の行を施さる



本コンテンツは、文化庁の委託業務として、平曲研究所が実施した平成21年度芸術団体人材育成支援事業 鳴海家本「平曲吟譜新集」に関する情報交流の成果を取りまとめたものです。従って、本コンテンツの複製、転載、引用等には文化庁の承認手続きが必要です。

坐る事も君所來人の後清渭を分とせ
あひての上上の内事とてそ有るもそそよ君
未幼主の時より生を柔和に受てを遠く去
ぬる兼安の比はひは在位の初の方十歳
斗んよもや成せ遠く余りよ紅葉を愛せ
さるみひの陣よ小山を築せ櫓楓の誠は色
美なる紅葉するを極する紅葉の山と名付て終

日よ下敷説有るは飽き玉に比中書然るを或
夜野分たしとぞ吹て紅葉は吹散し落葉
頗る狼藉也反守の伴の宮つと羽衣は連を
悉とく中里掃捨せり残れる枝散る木の
葉をバ檢集て風冷とくりる朝あれハ縫
面の陣よ酒温めて給はる所よこそあてん
られ口説奉りのお人初幸より先よと急ぎ

初て見るよ跡形をいふと問へ云くと云ふ人
の浅様指も君の執し思しるれつる紅葉を
の撫よあつる事よ知は汝等禁獄流罪も
及我身もいる成逆鱗より預りんとせ
し事ある業事候て居るまゝよ主上い
ぬ夜の御座をおさても敢て彼より幸有
て紅葉を獻儀有よせうりれいりよと

尋有る人何と奏可方もせしる有の候よ
奏ゆひ天系殊よ下使よげよ打笑おむ
てお習林間よ酒を温めて紅葉を焼と云詩の
表をバ初重去ハ又等ハ誰が教へるま
優ふも仕つる者就迎却て獻儀は預し
上ハ教て勅勘せうり
所方遠の行幸の有しよ
三重去てしよ鶏

人^{ひと}院^{ゐん}の^の唱^{なう}聲^{こゑ}上^{トウ}明^{めい}王^{わう}の^の眠^ねを^を驚^{おど}り^りに^に頃^{ころ}も^も
 成^{なり}し^しり^り甲^カい^いつ^つも^も上^{トウ}帝^{てい}寢^ね覚^さ醒^{せい}猶^{なほ}も^も一^{いつ}向^{かう}帝^{てい}
 寢^ねも^も成^{なり}さ^さり^りり^り下^ゲり^り況^{かう}や^や消^{しょう}る^る霜^{しも}夜^やの^の嚴^{げん}
 衣^い延^{えん}花^かの^の聖^{せい}代^{だい}國^{こく}土^どの^の民^{みん}共^{ども}か^かい^いり^り寒^{さむ}り^りる^る
 ら^らん^ん連^{れん}夜^やの^の衣^いを^を脱^{だつ}せ^せぬ^ぬ衣^いを^を着^きる^る
 事^{こと}あ^あん^んと^と迄^{いた}も^も思^{おも}ひ^ひし^しる^るが^がて^て我^{われ}帝^{てい}往^{かう}の^の至^{いた}ら^ら
 ぬ^ぬ事^{こと}を^をそ^そ傍^{かた}款^{くわん}有^あり^りける^る白^{はく}夢^む深^{しん}更^{せい}も^も及^{およ}ぶ^ぶ

福^{ふく}遠^{とん}人^{ひと}の^の叫^{きう}聲^{こゑ}あ^あり^りり^り供^ぐ存^{ぞん}の^の人^{ひと}と^とい^いふ^ふも^も付^つけ^けら^ら
 れ^れに^に主^{しゅ}上^{トウ}い^い是^ぜを^を夢^むさ^さて^て唯^{ただ}今^{いま}叫^{きう}ハ^ハ何^{なに}者^{もの}ぞ^ぞ
 あ^あき^き見^みて^て糸^{いと}れ^れと^と詠^{えい}け^けは^は上^{じやう}伏^{ふく}志^しし^しる^る辰^{てん}
 上^{じやう}人^{ひと}上^{じやう}日^{にち}乃^の者^{もの}は^は何^{なに}れ^れ其^{その}辺^{へん}に^にま^まを^を教^{しやう}て^て居^ゐる^る
 り^りる^るも^も或^{ある}は^は怪^{あや}し^しの^の女^め童^{どう}の^の長^{ちやう}荷^かの^の蓋^{がい}托^{たく}し^しる^る
 り^りは^はよ^よて^てそ^そ有^あり^りる^るい^いり^りと^と問^とひ^ひ主^{しゅ}の^の女^め子^し房^{ぼう}の^の院^{ゐん}の^の
 市^{いち}あ^あの^の傳^{でん}を^をあ^あら^らる^るは^は秘^ひ傳^{でん}と^とい^いは^はせ^せ仕^しえ^えられ^れ

とうつる衣きぬを指さてあるあるる 祿ろくは只ただ今いま男おとこの三さん人
 上上
 今いまで来きて集あつめて孫まごめるををや今いまは衣きぬを来き
 上上
 分わかへこそはあつてもも 估かへあひめ又またたるををり
 上上 上上 上上 上上
 あう立た宿しゆくりあふ可べ恥ぢぬ方かたもは坐おき
 上上 上上 上上
 夫そを思おもふは泣なくともぞ はつ語かたる はつ はつ 諸しよ彼か女め
 上 上 上 上 上 上 上
 童わらわを見みて系けい北きた由よし奏そう使しあつては逢あは主しゅ
 上 上 上 上 上 上 上
 上う夢ゆめしてそ 忙いそぎと怒いか何なん者ものの仕し業ぎふまゐり 下下
 上 上 上 上 上 上 上

[illegible]

少へさせめふ其方より花板の色あしる衣
 やいとける有るまは先のよう遠く色あ
 があがりしるをそ件女童より半下
 峰声 未夜深し亦る目もしそ下逢迎中
 上日の者を救多付て主の女房の居迄送り
 せ所望しりるそあるる去ハ怪の賤の男賤
 ハ女ある迄唯世君千秋万歳の寶集を

そ祈り奉つるハ

葵前

口説 まよ何よりも亦氣成る事より中宮
 の方よりいられける女房の仕ひる上童
 思はる外おれんと思へる事有るう只世
 の常顕露もそも世にて真成より差も所
 志浅くうらうしりバ主の女房も仕へ却